

森の贈り物（４）

『リンバロストの乙女』を中心に

青嶋由美子

はじめに

リンバロストの森

積み重ねられてきた樹齢の尊さを感じさせる木々。その枝々が雄々しく広がった向こうには、穏やかな青空。樹木の間には、深い藍色を湛えた湖。誰一人として乱す者が居ないかのような自然の中で羽化する一匹の蛾。それを見つめる大きな瞳。静かではあるが、確固たる意志の強さを秘めたその瞳を持つのは、この自然の中で生きてきた一人の少女。

テレビ上映用ドラマ『リンバロストの乙女』¹⁾の冒頭シーンには、このような場面が繰り広げられている。小説『リンバロストの乙女』が発刊された81年後に制作されたこのドラマは、作者ポーターが感じていた喪失への危機感を描いた映画となっていた。ポーターが危惧していたのは、彼女が愛して止まなかったリンバロストの森が、失われていくという現実。高額な税金を支払うために、伐採されていく数多くの大木。恐らくは、彼女自身が愛し慈しんできた一本一本の木が、貨幣経済のために失われていくことへの深い哀しみが、時代を越えてこのドラマを作らせる契機となったと言えよ

う。このドラマの中には、リンバロストの森を守ろうとする三人の女性が登場する。一人は、ヒロインであるエルノラ・コムストック。二人目は、死別した夫が愛した木々を守ろうとするエルノラの母キャサリン(ケイト)。そして、三人目は「鳥の小母さん」と呼ばれる博物学者。小説中では、単に「鳥の小母さん」とのみ呼ばれ、氏名を与えられていなかったこの女性は、ドラマの中では「ジーン・ストラットン・ポーター」と名乗っている。「鳥の小母さん」は、母親からの支援を得られないエルノラに、森の生き物の尊さを教え、経済的な不自由を余儀なくされた高校生活の精神的な支えとなってくれた。

ドラマの中で、この三人が守ろうとしたリンバロストの森は、現在では、どうなっているのだろうか。ジーン・ストラットン・ポーターの存命中、既に、彼女が最初にフィールド・ワークの場としたジニーバのリンバロストの森は失われつつあった。ジニーバの北東から、ジェイ・カウンティー南西にかけて広がる約25,000エーカーの森林湿地帯であったリンバロストの森。この森の中で1888年以来進められてきた灌漑工事は、森の姿を大きく変える契機

1) “a Girl of the Limverlost”. テレビ・ドラマとして放映された作品をビデオ化したもの。ユタ州ソルト・レーク・シティのBonneville Worldwide Entertainment製作。1990年発売。

となった。1913年には、ジーンが住むリンバロスト・キャビン(補註)周辺での排水溝を敷設するための工事が本格化した。石油採掘のための井戸が数多く掘られ、森や草原を切り刻むかのように、新しい道路が建設されていった。自然の宝庫であったジニーバのリンバロストの森は、最早、この時点で、彼女にとっての観察・研究の場としての役割を終えた。ジーンは、活動の場を変更せざるを得なかったのである。次なるフィールド・ワークの場となったのは、彼女が青春時代の幾つかの思い出を刻んだローム・シティの近郊であった。シルウアン・レイクの湖岸沿いに広がる約150エーカーの原生林を購入したジーンは、そこに第二のリンバロスト・キャビンを建てた。ジーンが生活した二軒のリンバロスト・キャビンは、現在、インディアナ州の州認定史跡に指定されている。しかし、双方とも、その周辺にはリンバロストの森の昔日の姿はない。ドラマ収録にあたって、この森の場面の撮影が行なわれたのは、実際にはオレゴン州であった。

ポーターが青春時代から愛読してきた本のうちの一冊が、ヘンリー・ソロウの『森の生活』であった事は以前に述べた。その中に、次に述べるリンバロストの森に満ちた“sounds and voices”と重なるコメントがあるので、それを引用してみる。

... At a sufficient distance over the woods this sound acquires a certain vibratory hum, as if the pine needles in the horizon were the strings of harp which it swept. All sound heard at the greatest possible distance

produces one and the same effect, a vibration of the universe lyre, just as the intervening atmosphere makes a distant ridge of earth interesting to our eyes by the azure tint it imparts to it. . . . The echo is, to some extent, an original sound, and therein is the magic and charm of it. It is not merely a repetition of what was worth repeating in the bell, but partly the voice of the wood; the same trivial words and notes sung by a wood-nymph.²⁾

「森の中で、あらゆる音が、宇宙の豎琴の振動音となり、森の妖精が歌う森の声も聞こえる」という表現には、ジーンが森に求めた、宇宙の根源たる生命を生み出す場所であり、また、森が生み出した生命体とその神秘の棲家というイメージに通ずるものがある。

さて、ジーンが愛して止まなかったこのリンバロストの森であるが、森全体の姿が詳しく描かれているのは、『リンバロストの乙女』よりも、むしろ、その前作の『そばかす』の方であろう。それは、一言で言えば、“It (The Limberlost) is lying here as it has lain since the beginning of time, and it is alive with sounds and voices(リンバロストの森は、世界の始まりの時からずっとここにあるようだし、様々な音や声と共に息づいている)”³⁾ という事になる。つまり、古代から生を保ってきた原生林であり、多くの生物の宿りの場所となっている事を示している。『そばかす』中から、この森に棲む動物や育つ植物を拾い挙げてみよう。

冬。リンバロストの森を襲うのは、black frost。水蒸気が少ないために、霜が生じることがなく、植物の葉や芽等が凍りつき、その組織が破壊されるような状況を呈す厳

2) Henry David Thoreau, *Walden and Civil Disobedience* (1854, 1849; rpt. New York: Penguin Group Penguin Books USA Inc., 1986), pp. 168-169.

3) Gene Stratton Porter, *Freckles* (1904; rpt. New York: Amereon House, . . .), p. 6.

寒．羊歯は刈られ、木々の蔓は大鋏で切り取られたようになり、低湿地の水分の多い緑葉が薙ぎ倒された．この森に残って姿を見せるのは、そばかすが餌付に成功した何種類かの小鳥だけ．白黒のユキヒメドリ、ツルスイキツツキ、ハシボソキツツキ、ショウジョウコウカンチョウ(猩々紅冠鳥)、アオカケス、烏、鶉であった⁴⁾．新たに、そばかすが与える餌を食べに兎や栗鼠もやって来るようになった．

春．鳥たちが、番いと巣作りに夢中になる時期．春から夏にかけて続く蝶や蛾の羽化．アジャックス揚羽蝶やアメリカオオミズアオが飛び交う．

夏．植物としては、野薔薇、ゼニアオイ、ハンノキ、サンザシ、柳、弟切草、マメダオシ、浮草、フォックス・ファイア、柔らかくレース状の蔓草や羊歯、ニワゼキショウ、コリンソウ、イトシャジン、青や白、黄色の葎、野性のゼラニウム、ベニバナサワギキョウ、苧環、ピンクの蘭、金鳳花、延齡草、サンギナリア、アメリカ敦盛草、雪割草、ウツボカズラ、テンナンショウ、ウーリー・ドッグ苔、野性のクレマチス、ツルウメモドキ、葡萄蔓など⁵⁾が競うように咲き乱れる．そばかすが、目をつけ観察を続けた青鷲やニシキヒワドリといった鳥類．

秋．「リンバロストは、栄華の絶頂を極めたシバの女王のように装っていた．秋の初霜は、女王の冠を、輝くトパーズ、ルビー、エメラルドといった宝石で再び飾った．足元には紫色の裳裾が流れ、手には黄金色の杓が握られていた」⁶⁾と表現されているように、夏にも増して美しい姿を見せていた．

鳥の雛は良く育ち、丸々としていた．アメリカモルモットの子供達はあちこちを走り回っているし、アライグマやフクロネズミ、マスクラットの子供の姿も見受けられる．勿論、子兎や子狐もいる．オオカバマダラ、イチモンジチョウ、アルジニス等の褐色系の蝶の季節でもある．渡り鳥の群れの飛来．それ等の餌となる野葡萄や黒山査子の実は、十分に熟している．そんな饗宴の時を過ごした後、再び迎える厳しい冬．

このようなリンバロストの森を舞台として繰り広げられる『リンバロストの乙女』という物語は、二つのメイン・プロットにより構成されている．最初のプロットは、前半を形作るもので、ヒロインのエルノラが、母親の愛情を手に入れるまでの、家族の絆に焦点を当てたもの．そして、後半のプロットは、エルノラと、フィリップという青年の恋愛を扱ったものとなっている．本稿では、前半のプロットについて論じることになる．

母と娘と隣人と

物語の冒頭、エルノラ・コムストックは、母親に愛されていない少女として登場してくる．高校へ進学して、勉学を続けたいという希望は、母親には、全く受け入れてもらえない．必死の思いでオナバシャという町の高校へ登校した初日、エルノラは、様々なことで心身共に打ちのめされて帰宅する．田舎じみた服装や髪型、お金を払わないと教科書が手に入らないこと(エルノラは、教科書は無償で貰えるものと信じて

4) *Ibid.*, pp. 13-14.

5) *Ibid.*, pp. 37-38.

6) *Ibid.*, p. 138.

いた), 田舎者だということで受けたいじめ, 徒歩での通学距離の3マイルという余りの長さ等等。そんなエルノラに浴びせ掛けられる母親の冷たい言葉。「そんな事は, 初めから分かり切っていた事だ。世間を, お前に見せるために黙っていてやったのだ。これに懲りたら, もう高校へ行きたいなどとは考えないだろう⁷⁾」という, 愛情のかけらも感じられない冷酷な言葉が, 母親ケイトからエルノラに投げ付けられた。読者にとって, 母親は, 完全な敵役として描かれている。この場面でこの母親像が提示してきているのは, 娘に対する愛情どころではなく, 親子の間に存在する深い溝と, 娘に対する信じられない程の憎悪のみである。

しかし, このヒロインは, 母親からの愛情を受ける代わりに, 隣人からの愛情を十分に受けていた。それは, ウェスリィとマーガレットというシントン夫妻からの深い愛情であった。この二人は, エルノラが生まれる以前から隣人として暮らしている人たちであり, ケイトが, エルノラを娘として決して愛そうとはしない理由を熟知している人物でもある。ケイトの悲嘆を16年間にわたって見つめ続け, 前半部分のクライマックスで明らかにされる憎悪の理由と, その理由をマイナスの面からプラスの面へと変化させる鍵を握っている二人である。折りに触れ, エルノラにその理由を仄めかしたりもするのだが, 「まだその時期ではない」という判断のもとに, 母娘の和解を遅らせた登場人物だという理解も可能である。マーガレット自身は, 授かった二人の娘をジフテリアで失っているため, 余計にエル

ノラへ愛情を注いでいるとも言える。

エルノラは初日, 高校から帰宅する前, リンバロストの森の小道で, ウェスリィと出会った。そして, 尋ねられるままに, その日の苦境を彼に語ったのであった。普段から, 愛情薄いケイトに代わっての, エルノラの保護者を自負しているシントン夫妻は, エルノラのために早手を打つ。エルノラの通学のための衣服や道具を揃えてくれるのである。二人は, オナバシャの洋品店へ出掛け, 女学生を捉まえて, 必要な物を聞き出す。この場面の描写は, 如何にも女性作家の手による少女小説らしい細かなものとなっている。おそらく, 男性作家であつたら, ここまでの描写は, 不必要だと判断して省略してしまうのではないだろうか。シントン夫妻が町の洋品店で購入してきた物を具体的に見てみると, 「洗髪用石鹸, 爪やすり, コールド・クリーム」「新しい洋服を仕立てるための四枚のギンガム地 水色, ピンク, 緑色のストライプの入った鼠色, 青の格子縞模様の焦茶色」と, それ等の布に良く映える色合の幅広な髪飾り用のリボンが各1ヤード半ずつ」「ハンカチと茶色の革製ベルト」「クラウンの部分に小さい金の止め金で留めた何本かの天鵞絨のリボンが巻いてある, つば広の黄色の麦藁帽子」「エルノラの小さな足に合った短靴と長靴」「レイン・コート」「雨傘⁸⁾」等である。このシントン夫妻の厚意は, エルノラには感謝をもって受け入れられ(エルノラは, 支払いは自分ですと主張する), ケイトには, 優越感と譲歩とを経験させる結果となった。ケイトが得た優越感とは,

7) Gene Stratton Porter, *A Girl of the Limberlost* (1909; rpt. New York: Amereon House, . . .), p. 24.

8) *Ibid.*, 第2章。

即ち、母親である自分を差し置いて娘の世話を焼く二人への忌ま忌ましさの上に成り立つ感情であった。エルノラは、シントン夫妻の厚意を受け入れるのに、吝かではなかったが、全て母親であるケイトの意思を優先し、彼女の肯定を確認してから自分の物とする事を決定していったためである。また、譲歩とは、エルノラが身形を整え、年齢相応に少々着飾る事を認めた点に見られる。普段は、貧窮を理由に、実用第一の物しか許さなかったのであるが、今回は、エルノラが、それなりに美しく見える事に気づき、ケイトにとって華美で実用的ではないと映る身の回り品の購入を認めたのであった。そして、どのような理由からかは推し量ることが出来ない、狂ったような笑いを人知れず繰り返したのであった。この箇所からも、ケイトの、一筋縄では理解が難しい、娘への思いの複雑さが読み取れる。

この時、シントン夫妻は、エルノラの為に、茶色の革のランチ・ボックスも購入した。母親が準備したのは、ブリキのバケツ形をした弁当箱で、エルノラは、これを高校へ持っていこうとはせず、いつも、森の中に隠していていた。さて、これに詰めた弁当の中味から、ケイトのエルノラに対する思わぬ愛情が感じとられ、読者は、母親像を変化させるべきかと考えさせられる。このランチ・ボックスに初めて弁当を詰める栄誉を担ったのは、マーガレットであった。胡桃入りのサンドイッチ、砂糖漬けの桜桃の乗ったカスタード・クリーム、鳥の

揚げ物、牛乳、サラダが、詰められた中味であった。翌日、二番手の位置に甘んじねばならなかったケイトは、マーガレットが作ったランチよりも、さらに手の込んだ昼食を準備していた。勿論ケイトは、“Wonder how it would do to show Mag Sinton a frill or two”(どうやったら、マッグ・シントンの目に物見せてやれるだろうか)⁹⁾ という気持ちから、張り切って準備したのであった。「卵の黄身を散らしたバター付きパンのサンドイッチ、考えられるうちで一番の芳香を漂わせているスパイス・ケーキが三切れ、良い匂いがして汁気がたっぷりの砂糖漬けのハムをスライスしたもの、トマトとセロリのサラダ、琥珀のように澄んだ砂糖漬けの洋梨、壺に入った牛乳、薄紙で包んだ胡瓜のピクルスが二切れ」¹⁰⁾ といった内容の豪華な弁当は、エルノラに次のように考えさせた。「お母さんは私のことを愛してくれている。私が生まれた時から、間違いなく私を愛してくれている。まだ、それに気づいていないだけなんだわ」¹¹⁾ と。さらに、その翌日、「出来たての四切れのケーキ、ぶなの実を使ったサンドイッチ、砂糖漬けの苺、薄荷と胡瓜をあしらったポテト・サラダ、見事に狐色に焼けた雛鳩」¹²⁾ の弁当に、エルノラは、「お母さんは、愛情を籠めてくれてはいないかもしれない、でも、それに代わる何かの感情を表現してくれているのだわ」¹³⁾ と考えるのであった。今世紀初頭、食事の準備は、母親たるものの家族に対しての愛情表現の一つの手段だと言えた。作

9) *Ibid.*, p. 104.

10) *Ibid.*, pp. 104-105.

11) *Ibid.*, p. 105.

12) *Ibid.*, p. 116.

13) *Ibid.*, p. 117.

者ポーター自身、大変な料理上手であり、家族のために、愛情の籠もった手の込んだ料理を作る事が非常な喜びであると考えた女性である。それ故、母親たるもの、単なる義務感からだけで、これだけの凝った昼食を準備しようという気持ちにはなれない存在として描く筈である。お節介にもエルノラに構うマーガレットへの対抗であっても、十分に時間を必要とする調理を行なったケイトの中には、エルノラへの無意識の愛情が存在していたのではないか。そもそも、マーガレットの鼻を明かしてやろうと思う事自体が、親である自分を無視して、エルノラからの愛情を奪うかに見えるマーガレットへのライバル意識の発露ではなかったのだろうか。ポーターは、日常生活の一部である料理という家事を通して、其々の登場人物のエルノラに対する愛情の度合いを垣間見せようとしたように思われるのである。

このように母親ケイト、娘エルノラ、隣人のシントン夫妻の関係を見てみると、冒頭に提示されたケイトのイメージには、可成の歪みが生じてくる。自ら、娘を愛せない、愛すつもりはないと言明する母親であっても、娘が他人の庇護を受けることになると、その介入を快くは思わない。自分の娘であるのだから、自分の思う通りに生きさせるのだという所有の感覚は、偏愛ではあるものの、紛れもなく、娘への関心の高さを示している。父親ロバートの死に纏わる秘密が、ケイトの心を捻れたものとしていた事、そして、その秘密が、ケイトからエルノラへの愛情の発露を妨げていた事は、後に、読者に明らかにされるのであるが、その伏線は、隣人シントン夫妻とケイトのやりとりの中に張り廻らされている。

エルノラの高校通学に必要な物品の準備という経緯を通して、単なる憎悪にしか見えなかった母親の感情が、想像されたよりもずっと複雑な物である点が、エルノラと読者に示される。

作者ポーターは、この母娘の深い確執を描くのに、隣人のシントン夫妻を媒介とし、さらに、日常生活に纏わる細々とした描写の中に、複雑な母親の心を籠めた。読者に僅かずつ明かされる、夫であり父親であったロバートの死に関わる秘密と共に、この何処か一途ではあるものの、エルノラに対しては捻れてしまったケイトの心の襞は、前半部分の重要な鍵である。このケイトの歪みが無かったら、エルノラは、リンバロストの森の恵みを受け取ることは無かったであろうから。

森の贈り物

金銭的なバック・アップとして

コムストック家の経済状態は、決して裕福とは呼べない類のものである。いや、むしろ悪いと言った方が適切かもしれない。しかし、それは、世帯主ケイトの狭量さと、世間との関わりを断ったその生活姿勢のせいである。ケイトが心を閉ざしていた二十年の間に、コムストック家の蓄財は、膨大なものに膨れあがっていた。ケイトがその事を知るのは、後半部分に入ってからであるので、前半部分を論じる本稿においては、比較的貧しい部類に入る家庭として考えてみるつもりである。

エルノラは、オナバシャの高校へ到着する前から、自分の身形に不安を抱いていた。しかし、その不安を振り切るように登校した。高校で学ばなければ、教養を身に付け

る事なく、自分が求めているものに到達する方法を見つけることも出来ず(それが、何であるが現在のところ分からない状態であっても)、みずぼらしい身形のまま、一生を過ごさなければならないという考えを抱いていたのである。ここに見られるエルノラの姿は、まさに、initiation story(成長物語)のヒロインのそれと合致している。隣人シントン夫妻の温かい申し出をそのまま享受してしまえば、エルノラは、シンデレラ・ストーリーのヒロインに堕ちてしまう。エルノラは、その境界線をしっかりと踏み留まった。

高校入学の初日、エルノラに、当然の如く、金銭的な問題が降りかかる。まずは、少女としてのエルノラに、そして、次に、女学生としての彼女に。

少女としての、或いは、女性としてのエルノラに持ち上がった金銭的な問題は、登校の際の服装に関するものであった。彼女が身に付けていたのは、幅の狭い貧弱なりボン(他の女学生は、蝶々結びにした大きななりボンをなびかせていた)、褐色のキャラコの洋服。丈だけは充分にあるのだが、ギャザー・スカートである(他の女学生は、褰やタックを沢山とったギンガムか麻の服を着ている)、小さな帽子(他の女学生の帽子には、立派な羽飾りがついていて)、大きな靴(他の女学生の靴は、教室を歩く時に大きな音がたたない)。年頃の少女が、他の少女との差を考えるのに、十分すぎる程充分な差異がエルノラを惨めにさせた。町の高校に通う男女は、田舎出身の少女を身形で判断したため、彼女が感じた悲壮感は大きな物となっていた。

女学生としてのエルノラのぶつかった金銭的な問題は、高校の授業料と教科書代についてのことであった。エルノラは、教科書は無償だと信じていたのだった。そして、村からの生徒は、年に二十ドルの授業料が必要であるという事も知らなかった。母親は、娘に払ってやれるような金は一文も無いと言う。それも、手酷い言葉で。学ぶ事よりも、税金のために家の仕事を手伝えと、エルノラの希望を砕くのを目的とした言葉を投げ付ける。これには、さすがのエルノラも我慢出来ず、自分の気持ちを言明する。

You understand enough that if you had the money, and would offer it to me, I wouldn't touch it now. And I'll tell you this much more: I'll get it myself. I'll raise it, and do it some honest way. I am going back tomorrow, the next day, and the next.

覚えておいて下さい、お母さんにお金がちゃんとあって、それを、私に出して下さるとおっしゃっても、私は手をつけません。もっと言うておきます。私はお金を自分で稼ぎます。私はちゃんとお金をこしらえます、それも、他人に恥ずかしくないやり方で。(学校へは)明日も、明後日も、その次の日も通います。¹⁴⁾

この初日、学校からの帰り道で、エルノラは、既に金銭的な不自由さについてウェスリィと話し合っていた。援助を申し出るウェスリィに、エルノラは、最後の最後までなった場合は、泣き付くかもしれないが、何とか方策を考えるつもりであると述べる。この時、彼女が考え付いていたのは、「胡桃を集めて売ること」「そばかすは、蝶々や蛾を売っていた、私、沢山集めてあるから」¹⁵⁾という二つの方法だった。これ等の方法は、

14) *Ibid.*, p. 25.

15) *Ibid.*, p. 21.

リンパロストの森の恵みを金銭に換えることであったが、さらに、この森と深く関わり、恩恵を受ける道は、高校通学二日目にして、既に開かれたのである。

エルノラのこの後の成長物語には、「鳥の小母さん」と呼ばれる女性との関わりが不可欠である。作者ジーン・ストラットン・ポーターの分身として登場してくるこの「鳥の小母さん」は、博物学者であり、善良な精神の持ち主である。或る時は、エルノラにとっての博物学の師となり、また、人生の善き助言者となり、時には、マーガレット・シントンと同様に、愛情薄い母親の代わりに、実の母親以上の愛情をエルノラに注いでくれる人物である。さらに、後半の物語で重要な役割を果たすオー・モア夫妻(そばかすと、その妻エンゼル)をエルノラと結び付けてくれる人物でもある。

さて、エルノラと鳥の小母さんとの出会いは、高校への通学が始まって二日目のこと。ツケで教科書を入手しようとしたものの果たせず、とぼとぼ歩くエルノラの目に、銀行の窓に掲げてある広告が映った。その広告の内容は以下の通りであった。

WANTED: CATERPILLARS, COCOONS,
CHRYSALIDES, PUPAE CASES,
BUTTERFLIES, MOTHS, INDIAN
RELICS OF ALL KINDS. HIGHEST
SCALE OF PRICES PAID IN CASH

求む：蝶々・蛾の幼虫、繭、蛹、樽蛹の殻、
蝶々、蛾、あらゆる種類のインディアンの
遺物 高価買入。現金払。¹⁶⁾

鳥の小母さんが、蝶々や蛾の標本やそれに関する物を、又、或る銀行家がインディアンの遺物を蒐集している事を教わり、エルノラは、鳥の小母さんを訪れた。自分が収

集した物が、鳥の小母さんの求める物なのかどうか、大きな不安を抱えたまま、玄関のベルを押したのであった。

高校の昼休みの時間に訪ねて来たエルノラを、鳥の小母さんは、優しく迎え入れてくれた。エルノラが語る収集物の詳細に関心を示しつつ、ランチのご馳走を彼女に勧めてくれる鳥の小母さんは、短時間の間に、エルノラの置かれている苦境を理解してくれた。特に、リンパロストから来ていることを知ると、特別な心遣いを示してくれた。ポーターの前作『そばかす』を読了している読者なら、よく知っている内容であるが、鳥の小母さんのフィールド・ワークの場は、一時、リンパロストの森であった。エンゼルやそばかすと共に、リンパロストの森の中で、鳥の成長の過程を写真に撮り続けたり、珍しい蛾や蝶々を追ったりしていた。だから、リンパロストの森が、自分の求めている物を大量に秘めている宝庫であることは熟知していたのである。その森の出身者であれば、鳥の小母さんの庇護の対象と成り得るのである。そして、又、リンパロストの周辺を良く知っているからこそ、田舎から、町の学校へ入学した時に体験する辛さを理解し慰めてくれた。鳥の小母さん自身が、そういった辛酸を嘗めていたので、エルノラの現在の状況を良く理解してくれたのであった。短時間の会見ではあったものの、鳥の小母さんとエルノラの間には、同志に近い関係が育っていた。

この日の夕刻、鳥の小母さんを伴ってリンパロストの森へ向かったエルノラにとって、リンパロストの森は、今までのような博物学を学ぶための場であることに加えて、

16) *Ibid.*, p. 41.

自立のために必要な金銭を生み出してくれる経済的自由確立の場ともなっていた。ここで、エルノラが、金銭的な足場を固めておく事は、母親に依存せざるを得なかった状況からの離脱へと繋がっていく。感情的な行き違いがあっても、今までのエルノラは、自活する能力を備えてはいなかった。それ故、母親に対しての決定的な衝突は、常に無意識のうちに避けざるを得なかった。それは、エルノラ自身の感情の自由な発露を妨げていたし、いつも、母親の顔色を伺いながら生活を送らねばならない状態を、彼女に強いていた。しかし、自分が深い興味を抱いて携わっていた事が、自分に必要な金銭を与えてくれる喜びを知ったこの時、エルノラは、自分の将来を切り開く道にはばたくための力強い翼を手に入れたのである。

初めて、鳥の小母さんに蛾を買ってもらった時、エルノラの手元には、59ドル16セントの現金が渡された。そして、彼女は、「ああ、美しいお前たち(ここでは、蛾を差す)。お前たちが、本を買えるようにしてくれ、授業料を払えるようにしてくれ、私を高校へ通わせてくれるんだわ」¹⁷⁾と、深い喜びに包まれたのである。そして、エルノラは、その週のうちに二百ドル以上の現金を手にしたのだった。

この時以降、高校卒業までの四年間、エルノラが必要とする金銭は、全て、リンバロストの森で得たものを通して、手に入れることになる。蝶々、蛾、蝶々・蛾の幼虫や繭、蛹、その脱け殻。これ等は、鳥の小母さんが必要としていた。昆虫に加えて、木の葉や花、草、苔、鳥の巣や、鳥の成長に関わるもの。これ等は、鳥の小母さん

が紹介してくれた公立小学校で、教材用として購入してくれた。インディアンが昔使ったらしい矢、筒、斧、パイプ、装飾品等。これ等は、あの銀行家が、自分のコレクションに加えるため、殆ど何でも買い取ってくれた。

こうして森の恵みにより手に入れたお金を、エルノラは、一体何に費やしていったのだろうか。授業料、教科書代は勿論であった。その他、洋服にも、お金は使われた。高校の入学式当日、打ちのめされたエルノラのために、シントン夫妻が揃えてくれた衣類や身の回り品の代金も、この森の恵みから支払った。その後は、必要な都度、洋服は買い足されたし、一度は仕立屋の手になるオーダー・メイドのドレスも作った。それから、母親ケイトへのプレゼントとしたマーク・トゥエインの本。父の形見のバイオリンの修理代。エルノラは、このような物に、リンバロストの森の贈り物である金銭を充てていった。そして、エルノラの性格から、決して無駄使いはされなかったのであった。

だが、高校卒業を三ヶ月後に控えて、エルノラは、危機に直面する。森の贈り物の残高が、底をついたのである。最終学年に入った時、エルノラは、学科の学習と、オーケストラの練習、小学校での博物学の授業に時間をとられ、森の恩恵を手に入れる時間に不足していた。さらに、森自体が変貌を遂げたため、必要な物を必要なだけ見つけられなくなっていたのである。

開墾の進む土地、玉蜀黍畑だった場所では、その幹は切り倒されていたし、沼地には砂利道が何本か敷設され、その周囲に

17) *Ibid.*, p. 52.

は、木造家屋が建ち、石油井戸採掘用の機械が据え付けられていた。……木が伐採されたところでは、湿気が減少し、流れなくなってしまう小川の跡が見られ、川の水高が少なくなり、川底が見えてしまう場所も出来た。¹⁸⁾

これは、作者ポーター自身が経験したリンパロストの変化であるのだが、エルノラにとっても、ポーターにとっても、自然の宝庫であったリンパロストの森が、最早、その魔力を失いつつあるという事が、明白に描かれている。このため、エルノラは、大学進学希望を断たれるのであるが、今度の森は、違う形での贈り物をエルノラに与えてくれる事になる。

ともあれ、リンパロストの森が恩恵として与えてくれる物売る事で、エルノラは、四年間にわたる高校生活を終了させる事が出来た。この森の中から、エルノラは、売買対象となり金銭を入手するための媒体となる具象物を数多く与えてもらった。さらに、博物学の膨大な知識をも授けてもらったのである。そのおかげで、高校四年生の時には、小学校での博物学の授業を幾つか受け持たせてもらえるようになったし、大学進学を一時断念した際には、小学校での博物学教師としての地位を得られた。リンパロストの森の中の動物や植物から、エルノラは、有形・無形の贈り物を数多く貰ったのであった。

森の贈り物

音楽の喜びを

エルノラは、高校へ進学するまで、音楽とは無縁の生活を送っていた。そのような

余裕のない生活を余儀なくされていた事も原因ではあるのだが。しかし、あの苦悶の中にあった入学式の最中にも、エルノラの耳は、オーケストラの演奏を捉えていた。場違いな気持ちになり、全てにおいて自信をなくしたあの入学式の会場でのエルノラ。が、彼女は、オーケストラの奏でる音楽のおかげで、華やかな町の女学生の間に歩を進める事が出来た。

エルノラは、音楽には、自分でも計りがたい程の感動を受けていた。そして、或る日のこと、その感動の源を探ってみた。

... she had listened to every note to find what it was that literally hurt her heart, and at last she knew. It was the talking of the violins. They were human voices, and they spoke a language Elnora understood.

何が、文字通り彼女の心を揺さ振るのか見極めようと、全ての音をじっと聴いた、そして分かった。それは、バイオリンの囁きであった。バイオリンは、人間の声をしており、エルノラが理解出来る言葉を語っていたのだった。¹⁹⁾

バイオリンを手にしたいと願うエルノラと、それを固く禁じる母親。それは、早世した父親ロバートが類似稀なる腕を持ったバイオリニストだった事が原因だった。悲しい思い出のために、娘にバイオリンを禁じる母親と、そんな父親の過去は全く知らないながらも、父親の血を濃く引き、バイオリンに強く魅せられている娘。ここに、母娘の新たな確執が生じてしまう。

テレビ・ドラマをビデオにした作品の中では、友人エレン・ブラウンリーのバイオリン・レッスンに付いていった時、エレンの弾くピパルディの『協奏曲イ短調第1楽

18) *Ibid.*, pp. 187-188.

19) *Ibid.*, p. 169.

章』を聴き、その直後に、すぐそれを真似て演奏してみせたエルノラであった。小説中では、オーケストラの指揮者がしまい忘れたバイオリンをこっそりと奏でてみたのが、エルノラが、この楽器に触れた最初であった。

自分のバイオリンを手に入れたいという強い願いを抱いたエルノラが訪れた先は、やはりシントン夫妻の家であった。「安いものでも構わない」からと言うエルノラに、マーガレットは、「安いバイオリンは、安っぽい音しか出ないから、ちゃんとした物を」と諭し、「お父さんのバイオリンが……」という、エルノラの知らなかった過去を遂に明かしてしまうのであった。しかし、父親が愛用したバイオリンは、コムストック家には無く、マーガレットは、その保管先を知っているようだが、エルノラに明かそうとはしない。このバイオリンの秘密は、ケイトとエルノラが和解へ至るための最終的な鍵である。何日かが過ぎ、ともあれ、エルノラの手には、父親の形見のバイオリンが握られることになる。バイオリンを手に入れてからの、エルノラの演奏技量の上達ぶりは、目を見張るものがあった。最初、修理と手入れが済んだバイオリンを楽器屋に取りに行った時、エルノラは、そこで調弦のやり方を教えてもらい、初歩の音階練習の楽譜を数枚貰ってきた。母親の手前、家での練習は不可能なので、ウィーク・ディには、学校の校長室に保管してもらい、昼休みに食事を摂るのを忘れる程熱心に練習した。友達の家泊まる場合は、必ず、楽器を持っていき、そこで練習をさせてもらった。オーケストラの指導者からの、オケで弾いてくれるなら、個人レッスンをし

てあげるといふ申し出を受け、エルノラの演奏技術は、短期間のうちに格段の進歩と遂げていった。何よりも、彼女の向上を支えたのは、自分も父親のように弾けるといふ強い信念であった。バイオリンへの関心は、年を追う毎に強くなり、学校へは早めに登校し、始業前に30分ずつ、昼の放課には1時間、終業後にはさらに30分という練習を毎日行い、週末には、シントン家で、その家に居る間中、弾き続けるといったバイオリン漬けの日々を送った。

このようにバイオリンにのめり込んだエルノラは、非常に上手くその楽器を奏でられるようになっていったわけだが、彼女は、既成の曲を演奏するだけではなく、自分の感情を音にして紡ぎだすことも巧みであった。いや、むしろ、後者の方が、彼女の本領を発揮出来ていたと言うべきかもしれない。

She had become so skilful that it was a delight to hear her play the music of any composer, but when she played her own, that was joy inexpressible, for then the wind blew, the water rippled, the Limberlost sang her songs of sunshine, shadow, black storm, and white night.

彼女は大層腕を上げたため、どんな作曲家の曲であろうと、彼女が奏でるのを耳にするのは、歓喜であった。しかし、彼女が、自らの思いを曲にして奏でる時、それは、言葉で表すことの出来ない喜びであった。その時、風は吹き、小川は漣を立てて流れ、リンパロストの森は、光と影、陰鬱な嵐と白夜の歌を歌ったのであった。²⁰⁾

常に、リンパロストの森と共に在った少女は、リンパロストの心を奏でる事が出来た。自然の詩を紡ぐことが出来、自然の心を歌え、人々に自然を思い出させる事が出

20) *Ibid.*, p. 186.

来る そんな演奏を行なえるのは、エルノラが、リンバロストの森を熟知しているためであろう。光が射す場所、影を作る所、蝶々や蛾の繭がある処、それ等が羽化する瞬間、鳥が巣作りをしている時、四季折々の動物や植物の様子、水の輝き、森の中に生息し、そこで呼吸をする全ての物への愛情が、エルノラの感受性の礎であり、楽器という媒介を通して、リンバロストの心を、人々の心へ伝えようとする気持ちの根本となっている。バイオリンの演奏にのめり込んでいくエルノラの姿からは、初めて、自分の想いを、言葉以外の表現媒体によって表現し得ることを知った少女の一途さを感じさせられる。前章で述べた、金銭的な自立が、彼女の心にある想いを自由に発露させるようになったことにも、その原因はあるであろう。音が想いを語る それは、エルノラがバイオリンの魅力として感じた「理解出来る言葉を語り掛けている」楽器を使ってこそ出来る事であった。そして、それを可能にさせたのは、エルノラ自身の練習の度合いに加えて、母親が今尚愛して止まない父口パートの音楽家としての血を継承したことに因っていると言える。

エルノラの、この深く磨ぎ澄まされたバイオリンの才能が、初めて、読者に提示されるのは、第十章である。「コムストック夫人、再び、リンバロストの森の歌を聞く」という章題にも示されているように、エルノラは、大観衆の前で、リンバロストの森の歌を奏でた。卒業式直前に催された観劇会の席上でのことであった。その描写が約二ページにも及ぶ、エルノラが演奏した森の歌は、リンバロストの森の息吹を、聴衆の

一人一人に語り掛け、森の一日を、聴衆に伝えるものであった。静かに風がそよぐ森の夜明け、駒鳥が先陣を切った様々な小鳥の鳴声、太陽の強くなる光、そして、木々をわたる風。雛鳥の小さな囀り。昼間の家畜たちの様子、牧場での機械音。飛び回る蜜蜂の羽音。やがて、迫り来る夕闇。夕刻に耳にする虫の声。夜鷹が、黄褐色の濃くなった空を翔び、暗闇が辺りを蔽う頃、梟の鳴声が森に聞こえ始める。やがて、みみずくの鳴声が支配的になり、月が皓々と輝く夜が更けていく。このような森の一日の様子を、エルノラのバイオリンは語ったのであった。そして、この森の歌を弾くエルノラの姿は、次のように描かれる。

... Her white throat and arms were bare, she leaned forward a little and swayed with the melody, her eyes fast on the clouds above her, her lips parted, a pink tinge of exercise in her cheeks as she drew her bow. She played as only a peculiar chain of circumstances puts it in the power of a very few to play. All nature had grown still, the violin sobbed, sang, danced, and quavered on alone, no voice in particular, just the soul of the melody of all nature combined in one great outpouring.

彼女の白い喉と腕は、空気に晒されていた。前へ少しだけ傾き、メロディと共に揺れるエルノラ。眼は頭上の雲をじっと見つめ、口唇は開かれ、弓を動かしながら、演奏の興奮のためか、頬を薄い桃色に染めていた。彼女は、極めて僅かの人間だけが特別な環境の連鎖から得られる力で演奏していた。すべての自然が押し黙っている中、バイオリンは啜り泣き、歌い、踊り、ぶるぶると震えた。特別な声があったわけではなく、大自然そのものが絡み合って一つの大きな進りとなったような魂の旋律が在った。²¹⁾

21) *Ibid.*, p. 203.

リンバロストの森の申し子とでも呼ぶべきエルノラの姿であった。エルノラは、あの森から、芸術に高めるべき素材を貰い、それを音に置き換えていったのである。森は、彼女に、自然のあらゆる場面を見せ、それを感受する能力と豊かな表現力とを与えたのである。リンバロストの森の持つ大自然の霊力と、エルノラの持つ感性、そして、エルノラの父親からの音楽性が一つとなって、素晴らしい演奏が生まれていった場面である。

が、誰もが認めたエルノラの「リンバロストの森の歌」ではあったが、唯一人、それに魅了されなかった人物がいた。母親のケイトである。章題に「再び」という語が入っていたが、ケイトは、以前、他ならぬ夫ロバートが奏でる「リンバロストの森の歌」を聴いていた。エルノラの奏す曲は、ロバートがかって演奏したそれと重なり、ケイトは、二度と戻ることの出来ない過去を辛く思い出したのであった。

Then she pitched headlong upon her own, and suffered agony of soul such as she never before had known. The swamp had sent back the soul of her loved dead and put it into the body of the daughter she resented, and it was almost more than she could bear and live.

それから、彼女(ケイト)は、すぐに自分の(ベッド)に身を投げ出し、かつて味わった事のない程の魂の苦悶を体験した。沼は、彼女が愛して止まなかった死者の魂を呼び戻して、彼女が嫌っている娘の身体に入れてしまったのだ。そして、その事実はそ

れに耐えながら生きる事が出来ないと思われる程の内容であった。²²⁾

ロバートの死の秘密が明らかにされるまで、和解には到達出来ない母娘である。リンバロストの森がエルノラに与えた、音を紡ぎだす愉悦は、あの母親を許そうと、あの母親に優しくしてあげようという気持ちをエルノラに抱かせたことがあった。しかし、ここまでの展開の中では、その演奏を直接耳にしてしまった母親にとっては、エルノラが奏でる音楽は、苦痛を生み出す災厄でしかなかった。他人にとっては、魂にまで沁み入る癒しの音楽であるのだが、この母親にとっては、母娘の亀裂をさらに深める原因にしかならなかったのである。

ともあれ、リンバロストの森は、エルノラに、音を奏でる快樂を与えてくれた。演奏に没頭することで得られる悦楽、自らが紡ぐ音に溺れる快感、言葉を語らずして、自分の想いを他者に伝えられる歓喜。リンバロストの森は、ここでもエルノラに贈り物をしてきていたのである。

やがて、この音楽に纏わる森の贈り物は、今までの憎悪を越えた母娘関係を構築する時の大きな助けとなっていくが、それは、いま少し先の物語である。

【つづく】

尚、本文中の引用部分に付した訳は、全て、筆者による。

22) *Ibid.*, p. 204.

補 註

前稿で、インディアナ州ジニーバに、ポーター夫妻が最初に建てたリンバロスト・キャビンについての詳細を *Lady of the Limberlost* の記載に基づいて紹介したが、今回、インターネットを通して、新たな資料を入手出来たので、改めて、紹介し直したい。

以下は、ネット上の記述の訳を中心としたものであり、対象は、州認定史跡として修復されたリンバロスト・キャビンの幾つかの部屋である。

このホームページのURLは、<http://our.tentativetimes.net/porter/gspics.html> である。このページ上には、インディアナ州立美術館売店で販売されている部屋の葉書がアップされているので、修復されたキャビン内の部屋の現況を知ることが出来る。

ホームページ「Photos of Gene Stratton-Porter's Limberlost Home」の抄訳

ポーター家の人々は、1895年、一人娘のジャネット誕生後にこの家を建てた。

この家の建築様式は、特異な“質素なアン女王様式”で、実質的には、外観は、美術工芸運動の様式に沿っていた。室内の見事な出来の飾り縁は、ヴィクトリア朝後期の様式である。木材の大部分は、四分の一に鋸引きされたアカカシワの羽目板張りとなっている。製材された材木は、ウィスコンシン州から取り寄せられた。

音楽室の *lincrusta* は、見事に復元された。……実際に行ってその目で見ることをお勧めしたい。実物は、写真で見るよりもずっとずっと豪華である。

ジーン・ストラットン・ポーターが愛した温室である。絵を描くための自然光が漲っている場所である。この部屋は、食堂から行き来出来る。この温室と屋外に広がる庭は、ジニーバ地区で活動す“An Herbal Affair”という名前の植物愛好家グループによって、丹精込めた手入れを為されている。

ポーター夫妻の寝室である。家の一階部分の奥の方に位置している。ベッドの足元や、暖炉の上には、ポーター夫人のケースに入った、膨大な数にのぼる蛾のコレクションが置いてある。この部屋で目醒め、窓越しに裏庭の聖域を身やり、鳥や花々、蝶々を観察したであろう姿が想像出来る。

このホームページ内に掲載されている室内の写真は、居間、修復前の音楽室、復元された *lincrusta*、修復前の食堂、温室、寝室の6枚である。

書 誌

Primary Sources

Porter, Gene Stratton. *Freckles.*; rpt. New York: Aeonian Press, 1977.

———. *A Girl of the Limberlost.* 1909; rpt. New York: Amereon House,

Secondary Sources

洋 書

Meehan, Jeanette Porter. *Lady of the Limberlost: The Life and Letters of Gene Stratton Porter.* 1927; rpt. New York: Amereon House, 1972.

Thoreau, Henry David. *Walden and Civil Disobedience.* 1854, 1849; rpt. New York: Penguin Group Penguin Books USA Inc., 1986.

ビデオ

“a Girl of the Limberlost”. Salt Lake City, Utah: Bonneville Worldwide Entertainment, 1990.

インターネット

URL <http://our.tentativetimes.net/porter/limber2a.html> (トップ・ページ)

<http://our.tentativetimes.net/porter/gspics.html>

<http://our.tentativetimes.net/porter/marshmap.html>